

THE BOSUI JOURNAL

# 防木ジャーナル

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

# 3

2012

No.484

特集

- 塗布含浸材を取り巻く最新動向
- 砂付ルーフィングの改修工事



## 曲者のセリフ



曲者とは、「普通とは違った人、表向きとは違い何かがありそうで、ひと癖あるしたたかな人」を指すようだ。

今年の芥川賞を受賞した田中慎弥氏は、選考委員の石原都知事が「バカみたいな作品ばかり」と酷評したことを受けて、敏感に喰いついた。これまで一度も働いたことがない、友達がいないなど、緊張感漂う記者会見の様子を見ていて、記者への意表を突く発言がおもしろかった。

「私がもらって当然」「都知事閣下と東京都民各位のために、もらっといてやる」「とっとと終わらせましょうよ」ときた。小心者と言われてしまった石原さん、眼をショボショボさせながら「いいじゃない、小説家とはそういうもの」「皮肉っぽくて…彼の作品は評価した」と大人の発言に続き、田中さん「慎太郎に肯定されたくない」とさらに追い詰めた。どちらも小説家で曲者だが、「共喰い」にならなきゃいい。

ところで3.11の大地震では、甚大な被害が発生した。大地震が来たのだから建物が壊れるのは当たり前と、地震を隠れ蓑に逃げようとする工事関係者の曲者もちらほらと目についた。注意深く調査し壊れ方を見ているうちに、「実は壊れて当然」の造り方をしている建物に幾つか出くわした。いわゆる建築基準法の配筋基準に抵触するような施工状態であれば、地震のせいではなく不法行為責任が問われるのである。発注者にしてみれば「地震が来たから壊れた」では納得できるものではないので、こういった場合の発注者のセリフは、「せっかくだから、直させてやる」だろう。一方売主や施工者側は、「バカみたいなので、直させて頂く」と変わる。

面白い傾向がある。外見上特に不具合が見当たらなければ、隠れたる瑕疵の存在をなかなか明らか

にできないものだが、今回の地震を契機にして、やむを得ない損傷に混じって隠れた不良施工部が白日の下にさらされた。地震は正直に建物を壊してくれたということか。

改修工事では、新築ではないので建物の造られ方に起因する瑕疵責任を問われることはないが、改修したひび割れや仕上げに関しては一定の期間を定めて性能保証することが一般的だ。元請と下請および材料メーカーの三者連名の連帯保証である。これもまた曲者で、工事を請負った者と材料を売った者という立場の違う三者連帯である。メーカーは、施工会社に「材料を買ってもらう」施工会社はメーカーに「材料を使ってやる」という構図であるが、この逆の言い

方をすると揉める火種を作る。しかし、ちょっと考えてみると、立場が違うものが連帯して保証することはおかしいと思う人々は少なくないだろう。

工事の不具合や欠陥は、工事に問題がある場合と材料に問題がある場合の2つである。いずれにせよ発注者は、当然のごとく高飛車に直せと言ってくるだろう。しかし材料メーカーの連帯保証で施工会社が潰れて会社がない場合、材料に問題がなくてもメーカーが責任を負うことになり面白くない。そんな時は、「施工会社が潰れ、不本意ながら直してやる」と堂々と言ってもおかしくない。また発注者は、せめて「善良なるメーカー各位に敬意を払い直して頂く」という気配りがあれば「とっとと終わらせましょうよ」と円満解決。

このたびの筆者の寄稿は、予定されていた寄稿者の都合により急きょお鉢が回ってきたもの。せっかくの執筆依頼であったので、ここは本誌記者へのねぎらいを込め、「気持ちよく、〇〇〇やる」ことにした。

((有)鈴木哲夫設計事務所 鈴木哲夫)

記事のはじめに